第42回関西学院史研究会（二〇一四・一二・一六）

関西学院創立一二五周年記念シンポジウム

W・R・ランバス宣教師の足跡を訪ねて

―ブラジル・アメリカ・中国への旅から―

パネリスト　ルース・M・グルーベル（関西学院院長）
多田　義治（関西学院同窓会企画委員長）
池田　裕子（関西学院大学学院史編纂室総合主管）

コーディネーター
神田　健次（関西学院大学学院史編纂室長）

神田　ただいまより学院史編纂室主催の第四二回関西学院史研究会・創立一二五周年記念シンポジウムを開催させていただきたいと思います。ご存知のように今年は一二五周年ということで、創立記念日を中心としてさまざまの大きな記念行事が行われてまいりましたが、今日も記念すべき行事といえると思います。関西学院の創立者のウォルター・ラッセル・ランバス先生は、ご存知のように世界各地で宣教の足跡を残してまいりました。一昨年より同窓会の企

画委員長の任をおっておられる多田義治さんを中心といたしまして、ブラジル、昨年はアメリカ、そして今年は、ついこの間でありますが、中国へランバス先生の足跡を求めて、ずいぶん多くの方々が一緒に参加されてその足跡を訪ねる旅をしてまいりました。この三年間の歩み、足跡を訪ねる旅の記録を、この機会にもう一度振り返っていただいて、今日的な意味というのがどういうことなのかということも合わせて一緒に考えたいと企画させていただきました。今日は、パネリストとしてグルーベル院長、同窓会の企画委員長の多田義治さんにお越しいただきました。それから、学院史編纂室総合主管の池田裕子さんです。多田さんが三回ご出席で、グルーベル先生は二回アメリカと中国、池田さんはアメリカに参加されましたが、それぞれの立場から発言をしていただきたいと思います。それではさっそく三回とも企画され、全部回られた多田さんからパワーポイントを使って、お手元の資料に即して始めさせていただきたいと思います。なお、司会をつとめますのは、学院史編纂室長を務めております神田と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

多田　ご紹介をいただきました多田義治でございます。同窓会では企画委員長を仰せつかっております。関西学院大学を昭和三六年に卒業いたしました。本日このような席にお招きいただきまして大変光栄に思っております。同窓会が三年企画で実施をいたしました「W・R・ランバス博士の足跡を巡る旅」は、二〇一二年から始まってブラジル編・アメリカ南部編・中国編の三回で延べ百名の方にご参加をいただき、一一月一〇日の中国を最後に終ることができました。三年間で世界をぐるり一周するような格好になったわけですが、その間何のトラブル、事故もなく皆さん方無事に帰国いただき、また現地ではそれなりに大きなお役目を果たしていただきまして、たいへん喜んでいる次第です。今日は私の方から実施いたしました旅行の趣旨や訪問先を足早に振り返って皆さんにご紹介したいと思います。特に、昨年アメリカ南部にまいりましたのが、最大のハイライトでいちばん重要視した企画です。と申しますのは、ランバス家の母教会でありますパールリバー・メソヂスト教会の「ランバス・デイ」が年に一回、一〇月の第一木曜日に開かれるという情報を得ましたので、それに照準を合わせて実施いたしました。「ランバス・デイ」は長年続いている行事でありますが、関西学院から大きなミッションで参加したのは初めてということで、地元関係者の方々に温かい歓迎をいただきました。その時の様子が、テ

レビ、新聞等でも報道されましたので、テレビの報道の一部を二分二〇秒のビデオで見ていただきます。

テレビビデオ報道
「ＷＬＢＴニュース＝Lambuth Day」米国ＮＢＣ系列
二〇一三年一〇月三日放送から
池田裕子さん、グルーベル院長がインタビューを受ける映像

いかがでしたでしょうか、わずか二分二〇秒の映像でございましたが、昨年の「ランバス・デイ」では、地元から大きな歓迎をいただきました。ミシシッピー州の州都でありますジャクソンから車で約一時間の距離にあるマディソン郡までバスでまいりましたが、ちょうど市のはずれからマディソン郡警察の白バイとパトカーが待機してくれていました。そこからは先導をして次々と交通を遮断して通してくれたものですからあっという間に着いてしまいました。そういういきなり思いがけぬ歓迎を受けた次第でございます。

それでは、今から三年の企画を振り返ってまいりたいと思います。そもそも学院創立一二五周年にあたって、同窓会としての記念事業や記念行事を二〇一一年から企画委員会で検討してまいりました。沢山の提案がございましたが、実行された最大の行事は今年の五月三一日ユニバーサル・スタジオ・ジャパンをほぼ貸切状態で実施しました総会です。「オール関西学院フェスティバル」という名称を付け同窓・教職員・学院在籍者など関西学院に繋がる一万六千人の方々にご参加をいただいて一日ユニバーサル・スタジオ・ジャパンで過ごしたわけでございます。同窓会で掌握している申込者を分析いたしますと、圧倒的に四〇歳以下の方、また平成の卒業の方が多かったのです。だいたい同窓会活動というとアフター六〇歳の人が活動の中心になるのです。二〇万人を超える同窓がいる中で、若い人や、近年では大学卒業の半数近くが女性であることから、平素同窓会活動に参加いただけていない層をターゲットにした企画がＵＳＪの総会でございます。見事に的中いたしまして、先ほど申しました四〇歳以下の人が約六八パーセント、平成卒業の方が四八パーセントという結果が出ております。そういった行事は、大変な精力を傾注しても一日限りでございます。企画委員会で、なにか記念になる息の長い行事を考えて提案されたのが「Ｗ・Ｒ・ランバス博士の足跡を巡る旅」でございます。ランバス博士が関西学院を創立さ

れる前、また後に大きな業績を世界各地で残されていますが、あまり身近に紹介されていないので、一二五周年にふさわしい事業として学院を創立した想いを同窓や現役の皆さんと共有できるような形にしたいということで実施をいたしました。ただ足跡を訪ねて歴史的なことばかり追いかけても面白くないので、ブラジル・アメリカ・中国それぞれ観光と、もう一つの目的を抱き合わせて実施をいたしました。三つの国の訪問都市にある支部との交流会や協定校との行事なども考慮しました。内外の多くの方に準備段階からご支援とご協力をいただいて実施することができました。

最初は二〇一二年のブラジルから始まり九月二八日から一〇月八日まで一一日間サンパウロ、リオデジャネイロ、世界三大瀑布で有名なイグアスにも行ってまいりました。いちばん長い期間であり、お金もかかる、そして遠い。日本のちょうど反対側ですから飛行機に乗っている時間だけで最低二四時間以上というのは厳しかったようです。当初は四〇人程度の参加者を目論んだのですが、初回は最少催行人員の二〇名を集めるのに苦労しました。私の関係している支部・団体の方に助けていただいてやっと二〇人集めたという状況でした。

皆さんのレジュメには訪問先や現地行事をすべて書いてございますが、この画像で紹介するのはランバス博士の足跡の部分を前面に掲げました。

ランバスとブラジルは、どんな関係があるかと聞かれました。一八八九年に関西学院を創立された二年後の一八九一年にアメリカに帰国されて、米国南メソヂスト監督教会の伝道総主事をつとめられ、その後最高位の監督に就任されています。ブラジルには伝道総主事時代の一八九四年と一九〇四年の二回。一九一〇年に監督になってからは、毎年七月か八月に年会を主宰するために行っておられます。当時、飛行機はありませんからアメリカから行くには相当な時間がかかります。ブラジルでは、毎年一カ月ないし一カ月半ぐらい滞在をされたようです。ランバス博士が監督に就任するまでブラジル年会は一つしかなかったのですが、活動が広がっていたので、一九一〇年に年会を北と南に分け、南年会が設けられ、二カ所の移動はかなりの強行軍だったようです。ランバス博士はブラジルに行く度にリオデジャネイロに寄り各地へ向かわれました。リオデジャネイロは町の真ん中に南メソヂスト監督教会のブラジル宣教拠点として最初に作られたカテテ教会があります。大きな聖堂の横に小屋のように見える建物が、最初

に誕生した教会です。一九〇〇年代から大聖堂になっていました。監督として訪れた一九一一年の写真が手に入りましたので、私どもは一〇一年前の写真と同じ場所で、記念撮影をしました。前列の左から三番目がランバス博士です。今回の前列三人目は元学長の平松一夫教授です。同じ格好で撮った写真のひとコマです。そういったところを訪ねてまいりました。

第二回は昨年、アメリカ南部テネシー州にまいりました。ミシシッピー州のジャクソン、それからナッシュビル、ニューヨークそういったところにまいりました。毎回大きな横断幕を持参し写真を撮る時に使いました。ブラジルの時は関西学院同窓会ブラジル交流団と書いてありますが、ポルトガル語になっていまして「Comitiva de Intercâmbio ao Brasil」、アメリカの場合は「Tracing Dr. W. R. Lambuth's Footsteps in the U.S.A.」、こういう横断幕を持参してまいりました。アメリカ南部の参加者は、三三名でした。グルーベル院長、学院史編纂室の池田さんにも同行いただきました。アメリカにつきましては、本当に池田さんに準備段階から現地のコンタクトなど頑張ってやっていただきました。そして、年に一回一〇月の第一木曜日に開催されるパールリバー・メソヂスト教会の「ランバス・デイ」に出席をいたしました。この教会は一八三三年に創立されましたが、ちょうど関西学院が創立した一八八九年に建て替えられてこの形になっています。すでに一九七三年に教会としての役目を終え、電気、ガス、水道の設備もないのですが、歴史建造物として保存されていて「ランバス・デイ」にだけ使用されています。この教会の前にモニュメントがございます。ここからランバス博士の父ジェームス・ウィリアム（J. W. Lambuth）が、中国伝道に旅立ったと刻まれています。この教会の裏手にはランバス家の墓地がございます。ランバス博士は中国に眠っていますが、ここにはランバス家の方が眠っておられ、綺麗に整備されています。

二〇一三年の「ランバス・デイ」記念礼拝は、関西学院からの参加者で教会がいっぱいになり、隣に大きなテントを張って私たちは教会の中に招き入れてくれて、一般の地元の方はたくさん外に溢れた記念礼拝でした。今日も来られています同窓会副会長の辰馬勝さんを団長とするアメリカ交流団三三名が出席をいたし感動いたしました。後ほど院長がお話されると思いますが、その時に、ランバス家の古材から作られた十字架が、グルーベル院長とミシシッピー州監督のスワンソン（Bishop James E.Swanson.Sr.）

さんに贈られた光景でございます。その後「ランバス・デイ」の交流会がありました。集われた皆さんと親しく懇談をする交流会がもたれ、本日も東京から参加されているメンバーの一人が折り紙を持参されて、作り方を体験していただくと同時に、皆さんにプレゼントしました。

州都のジャクソンでは、南メソヂスト監督教会が創立したミルサプス大学を訪問しました。ランバス家の歴史資料をたくさん所蔵されております図書館を見学した後、学生さんがキャンパス・ツアーをしてくれました。途中、関西学院の時計台を彷彿させるような風景に出くわしたわけです。なんとなく似ていますでしょう。

「ランバス・デイ」に来られていたミシシッピー州の監督のスワンソンさんは、その時に関西学院創立一二五周年には行きたいと言われていましたが、今年五月二九日に関西学院来訪が実現したのです。そしてランバス記念礼拝堂でチャペルアワーをもっていただきました。その時の写真です。アメリカ交流団のメンバー何人か集っていただいて、チャペルアワーを一緒にすごさせていただきました。

テネシー州のナッシュビルでは、ランバスが神学と医学を修めたヴァンダビルト大学を訪問しました。公式ガイドの方が、我々の来訪までに図書館でたくさんの資料をひも解き、ランバスが学んでいた当時の様子を調べてご案内をいただき頭が下がりました。そして、ナッシュビルでは、ランバスが初代牧師を務めたウッドバイン合同メソジスト教会も訪れました。礼拝堂にはランバスがこの教会で最初に牧師を務めたことを表す美しい配色のステンドグラスがあります。何年か前に泥棒が入ってこのステンドグラスが壊されました。それを聞きつけた関西学院がその改修費用の一部を募金したというお話も残っておりました。訪問した時に牧師さんが訪問日を勘違いされ、鍵がかかっていたというハプニングがありましたが、実は牧師さんが考えておられる日にち通り行ったら、三〇分でおいとまできなかったような歓迎の準備をされていたようです。今年の夏休みにこのウッドバイン教会を高等部が訪問されております。皆さんにお配りしている『学院史編纂室便り』のなかにもその様子が載っているかと思います。

アメリカの最後は、ニューヨークでした。ランバスが東洋医学を研究して博士号を取得されたベルビュー大学病院跡を外部から見学しました。その大学は、現在ニューヨーク大学医学部に変わっておりますが、当時の施設はホームレス関係に使用され残っていました。

そして今年の中国編で「W・R・ランバス博士の足跡を

巡る旅」は最終回です。一一月六日から一〇日の五日間実施いたしました。この日程設定には、少し意味がありまして、一一月一〇日でランバス博士は一六〇歳、つまり生誕一六〇年になるのです。従って、その時期に合わせて一一月六日から一〇日を選定しました。今回は過去最高人数の四七名の方に行っていただきました。ランバス博士は一八五四年一一月一〇日に上海で生れておられます。医療宣教のために最初に赴任した地も上海でした。その後、江蘇省の蘇州にも医療宣教を開始されて一八八三年一一月八日、今から一三一年前に博習医院という病院を開設されました。この病院を原点として一九〇〇年に東呉大学が誕生し、現在の蘇州大学になりました。

まずは一一月七日に蘇州市にある蘇州大学を公式訪問いたしました。写真の中央に立たれている蔣星紅副学長から、関西学院と蘇州大学は創立者を同じくする大学だから今後も深く関係を保っていきたいという、たいへん素晴らしいメッセージを私たちにいただきました。来年には蘇州大学に関西学院大学オフィスが開設されるそうです。予定されている国際センターの四一〇号室には、すでに什器が入っており見学をしてまいりました。そして、蘇州大学時計台をバックに中央芝生で蔣副学長と私ども一行が記念撮影をしました。こちらは、蘇州大学の前身である東呉大学のキャンパスです。蘇州大学は江蘇省最大の総合大学で、キャンパスはいくつも分かれていますが、国際合作交流処（国際センター）の陸恵星副処長には、旧東呉大学キャンパス内を要領よく案内いただきました。アメリカ南メソヂスト監督教会が建てた建物を見学しながら母校の雰囲気に浸りました。それからキャンパスの外へ足を延ばして、一八八三年一一月八日にランバス博士が義弟のパーク師と共に創立した博習医院旧址（蘇州市文化遺産）を見学しました。現在は、石碑から六〇〇メートル西に蘇州大学医学部附属第一病院という蘇州市重点病院となっています。入口の大きな看板には「一八八三年博習創立」と記されております。その近くには、南メソヂスト監督教会が創設した聖ヨハネ教会（聖約翰堂）があり、こちらも蘇州大学の外に位置しているため行きにくいところ全員で訪問、牧師が喜んで迎えてくれました。

そして上海に移動。一一月九日のランバス生誕一六〇年の前日に当たりますが、朝一〇時から休恩堂（ムーオンタン教会）の礼拝に一行のほかに上海在住の同窓も誘って出席しました。この教会は、ランバス博士が一九二一年に横浜で亡くなった後、葬儀が営まれた場所でもあります。礼

拝前の九時半から小さな礼拝堂で、関西学院創立一二五周年を記念した特別祈祷会をもっていただきました。真ん中におられるのが主任牧師さんです。その右は今回コーディネーターとして同行いただきました福岡女学院の准教授・徐亦猛先生です。関西学院大学神学研究科の博士課程前・後期を出られた、今日司会されています神田健次先生の教え子です。上海生まれで、終始通訳なども引きけていただきお世話になりました。

これまでが、三年にわたりますランバス博士の足跡に直接関係あるところでございました。限られた期間では何かと難しいことも多かったのですが、関西学院に関係する内外の方々に、あらゆる面でたいへんご協力をいただいた次第でございます。

ついでながら手短に、この旅の中で実施した関連行事をここに載せております。ブラジルではブラジル支部総会・交流会をいたしました。交流団二〇名と支部から二〇名が出て非常に和やかな交流会が持たれました。関西学院から見ると地球の反対側にある世界中で一番遠方の支部です。今回は、二〇一〇年関西学院と学術協定を締結したサンパウロ大学との初めての合同シンポジウム開催がありました。大学から商学部の平松一夫教授、国際学部の鷲尾友春教授が出られて、非常にいいタイミングでした。サンパウロ大学は州立総合大学で州内に七つのキャンパスがあり学生数八万人、南米最大の教育機関でございます。

それから、昨年はニューヨーク支部との交流会には交流団から三二名、ニューヨーク支部から二一名が集い交流をいたしました。グルーベル院長、同窓会から辰馬副会長がご出席されました。ことしは支部との交流会は、蘇州でKG蘇州会の交流会を持たしていただきました。中国には多くの同窓が活躍されておられますが蘇州にもこういう会があることを直前に知りまして、ひと晩夕食をともにする機会ができた訳です。それから上海支部とは、一一月九日休恩堂の礼拝後、別の会場で支部から二〇名に参加いただき交流会を開きました。支部会員は若い人が多くて楽しく和やかに過ごしました。

同窓会の三年企画「W・R・ランバス博士の足跡を巡る旅」は、ランバス博士のルーツや偉業に触れただけでなく、関西学院が一二五年間に築いた同窓の絆を深める機会にもなりました。また、学院が目指す世界市民とは何かを体感し、次代に向かっての大きなステップになったと思っています。私の報告はこれにて終らせていただきます。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

神田　ただいま多田さんから三回に亘るランバス先生の足跡を巡る旅をたいへん分りやすくポイントを得てご説明いただきました。本当にありがとうございました。それではそのお話を受けて、続きましてグルーベル院長からアメリカと中国の方に実際に行かれた旅のなかからお話を伺いたいと思います。ではよろしくお願いします。

グルーベル院長　皆さま、こんにちは。私は「W・R・ランバス博士の足跡を巡る旅」に、二度参加させていただき、感謝しています。ご一緒させていただいた皆さまが素晴らしく、旅を一層楽しいものにしてくださいました。

まず、昨年、アメリカのパールリバー教会でいただいた十字架について紹介します。この十字架は木製でしっかりした造りですが、それほど重くはありません。近所のマディソン合同メソジスト教会のメンバーであるジム・ミラー(Jim Miller)さんが、ウォルター・ランバス先生の祖父、ジョン・ランバス（John Russell Lambuth）さんが住んでおられた家の板から作られました。この家は一八四七年に建てられ、ジョン・ランバスさんの後、現在の所有者であるロイ・ハート（Roy Hart）さんの一家が管理していましたが、老朽化のため取り壊されました。その際、まだしっかりしている板は残し、テーブルや馬小屋など様々な用途に再利用されました。この板はサイプレス（イトスギ、セイヨウヒノキ）なのですが、近くのパールリバーの川沿いにはたくさんのサイプレスがあったそうです。ロイ・ハートさんによると、この板は床の根太だったのではないかということですが、十字架の茶色い部分も、真ん中の黒い部分もどちらも同じ板から取られたそうです。ウォルター・ランバス先生が若いころ、お祖父様の家を訪ねた時、この板の上を何度も歩いたことでしょう。ランバス先生だけでなく、お父様のジェームズ（James William Lambuth）さんやお母様のメアリー（Mary Isabella Lambuth）さん、お祖父様のジョンさんの足音も感じられるような気がします。この十字架は関西学院大学博物館に保管されています。またスワンソン牧師にも贈られましたので、ミシシッピーのメソジスト教会にもこれと同じ形の十字架が保存されています。

先月の中国の旅では、徐先生にいろんな教会に案内していただき、ランバス先生の葬儀が行われた沐恩堂（Moore Memorial Church）にも行きました。中国のキリスト教は日本やアメリカとは組織が異なりますが、大変熱心な信者さんがおられ、心の悩み、生活の悩み、人生の悩みのある方々が教会での交わりによって勇気を持って互いに支え

あっている姿を目にしました。沐恩堂は大勢の信者さんがおられ、私はイエス・キリストぐらいしか聞き取れませんでしたが、牧師も熱意をもって説教をされていました。皆さんがしーんと静かに聞かれていました。何百人もいたと思います。

多田　千人入るんですが入りきらなくて、第二礼拝堂とか小さな会議室全部モニターを置いて、いっぱいだったですね。一日四回ある礼拝の二回目に出たのですが、それが一番多いそうです。朝の一〇時からというのが。

グルーベル院長　ランバス先生や、お父様、お母様が中国で始められた教会や福祉活動、教育活動などが、形は変わっても、大勢の人たちに大きな影響を与え、慰めと励ましを送りつづけているように感じました。

　スワンソン牧師が今年五月に関西学院に来られた時、上ケ原のランバス記念礼拝堂でお話をされました。「ライオンキング」の「自分は誰であるかを忘れてはならない」というメッセージに例えて、「私たちは『神の子』であることを忘れてはいけない」というお話でした。日本に住んでいる私たちも、アメリカに住んでいる人も、中国に住んでいる人も、ブラジルに住んでいる人も、みんな同じ「神の子である」というつながりをもっています。この旅でそれを改めて感じました。皆さま、どうもありがとうございました。

神田　引き続きまして、アメリカへ行かれました池田さんにお話をしていただきます。よろしくお願いいたします。

池田　学院史編纂室の池田裕子と申します。冒頭のテレビニュースの映像で最初に登場したのが私です。パールリバー教会で、マスコミ（新聞社、テレビ局）の取材を受けました。大きなテレビカメラが私に向けられた時どうしようかと思いましたが、立場上インタビューを断ることはできませんでした。もう若くはないので、心臓には毛が生えていますが、英語が苦手な私にとっては、英語で口頭試問を受けたような気分でした。私は留学経験がありませんから、あのひどいカタカナ英語は関西学院で身に付けた英語ということになります。

　このような大歓迎を受けたことにより、「ランバス・デイ」を主催している地元の方々は私たちの訪問をどのように受け止めているのだろうと考えさせられました。ミシシッピー州の方々にとっては、一五九年前に自分たちが中国に送り出した若きJ・W・ランバス夫妻（関西学院創立者の両親）の蒔いた種が大きな実りをもたらしたことを示す象

徴的な出来事だったのかもしれません。それから、アメリカのディープ・サウスと呼ばれる地域を南部出身でないアメリカ人のグルーベル院長と行動を共にしたことも私にとっては得難い経験となりました。ランバスの母メアリーが南部の人ではなく、ニューヨーク州出身だったことを実感しました。

本日は、アメリカ南部編の実施にあたり、先方とどのように連絡を取ったかということについてお話ししたいと思います。

多田さんから同窓会が企画した創立者の足跡を巡る三年計画のツアーの話を伺った時、素晴らしい企画だと思いました。その二年目となる二〇一三年の目的地をアメリカ南部としたいが、具体的にどこを訪ねたらいいだろうと相談を受けました。私は、ランバス・ファミリーの故郷ミシシッピー州パールリバーとランバスが大学生活を送ったテネシー州ナッシュビルをお勧めしました。

ミシシッピー州のパールリバー教会（今は教会としての役割を終え、史跡となっています）では、毎年一〇月の第一木曜日に、地元の方々とランバス・ファミリーの子孫（創立者の直系は孫の代で絶えています）が集まり、「ランバス・デイ」の礼拝が行われています。その礼拝に参列する形でツアーを実施すれば何よりの記念になると思いました。

この礼拝には古い歴史があります。一九〇〇年、ランバス家の働きを記念し、教会の正面に記念碑が建立されました。以来、毎年記念礼拝が行われるようになりました。それが「ランバス・デイ」と命名されたのは一九二七年のことだそうです。このパールリバー教会には関西学院から何度か訪問団を送っています。創立九〇周年を記念して行われた海外諸大学視察旅行では、久山康理事長・院長以下七〇名の教職員が立ち寄りました。また、二〇〇四年には、ランバス生誕一五〇年を記念し、山内一郎理事長、畑道也院長、平松一夫学長、田淵結宗教総主事が訪問されました。その時、私も同行しました。いずれの機会も、関西学院発祥の源ともいえる教会で礼拝の時が持たれました。しかし、その礼拝はこちらの旅程に合わせたもので、「ランバス・デイ」に参列するという形ではありませんでした。

それから、もうひとつの訪問候補地ですが、ランバスはテネシー州ナッシュビルにあるヴァンダビルト大学で医学と神学を学びました。学びながら、ウッドバイン教会の初代牧師を務めました。教会には馬で通っていたそうです。教会の建物は既に建て替えられていますが、ステンドグラスにランバスの名が刻まれていると聞いていました。その

ステンドグラスを見て、若き日のランバスの働きに思いを馳せることができると思いました。今から一〇年前、ウッドバイン教会に泥棒が入ったことを先ほど多田さんがお話しになりました。そのことを関西学院に知らせてくださったのは学会でナッシュビルを訪問された法学部の鮎川潤先生です。実は、ナッシュビルでランバスに関係ある教会はどこですかと、鮎川先生は日本を発たれる前、私にお尋ねになっていました。お時間があったら、ウッドバイン教会をぜひお訪ねくださいと、私は申し上げていました。

多田さんは、私の提案に賛同されました。そして、現地関係者に打診してほしいとおっしゃいました。それは、ツアー実施のちょうど一年前のことでした。「ランバス・デイ」に出席されたランバス・ファミリーの子孫から、私は毎年礼拝の様子をお聞きしていましたので、翌年の予定を尋ねたり、同窓会が参列を考えていることを連絡したりするのに、ちょうど良いタイミングでした。実際、私が真っ先に連絡したのは、創立者ランバスの父の弟の子孫に当たるジョン・サウス・ルイス（John South Lewis）さんでした。こうして、二つの教会とその近くにある大学を回るという案ができました。二つの大学とは、ミシシッピー州ジャクソンで、地域のメソジスト教会の記録を収集しているミルサプス大学とテネシー州ナッシュビルにあるランバスの母校ヴァンダビルト大学です。

八月になると、ツアーに同行するよう同窓会から頼まれました。そこで、私が打診したミシシッピー州とテネシー州の訪問先に関しては同行し、その前後に独自の資料調査を行う計画を大急ぎで立てました。

ミシシッピー州は、私自身が二〇〇四年のランバス生誕一五〇年の時訪問していましたので、関係者との連絡・調整はスムーズでした。特に、ミルサプス大学アーカイブズ（J. B. Cain Archives, Millsaps College）のデブラ・マッキントッシュ（Debra McIntosh）さんが力になってくださいました。お目にかかったことはなかったのですが、同じ仕事をしているという安心感から、何でも相談することができました。私が牧師でしたら、まず教会に連絡したかもしれません。やはり同業者の方が話しやすいのです。ミルサプス大学では、本当に心温まるおもてなしを受けました。例えば、先ほどの写真にもありましたが、私たちが訪問した時、デブラさんは軽食と飲み物をミルサプス大学創立者の肖像画の前に美しく並べて私たちを迎えてくださいました。また、キャンパス・ツアーのあと、一人一人に記念品をくださいました。デブラさんとは帰国後もランバスに関

する資料のことなどで何度か連絡していますが、実際にお目にかかったということは大きく、ご迷惑かもしれませんが、より一層頼れる存在になりました。

「ランバス・デイ」を企画・実施している歴史委員会（Pearl River Church Historic Council）のエルバート・ヒリアード（Elbert Hilliard）さんとも何度もメールのやりとりをしました。エルバートさんは心配性で、私たちが昼食をとるレストランからパールリバー教会までの移動が心配でたまらなかったようです。多田さんがおっしゃったように、最終的にパトカーと白バイによる先導を手配されました。白バイをご覧になったグルーベル院長は大喜びされました。すべての行事を終え、私たちが教会を後にする時は、「もう行ってしまうのか。涙が出そうだ」と言って別れを惜しまれました。

「ランバス・デイ」には今も地元に住むランバス・ファミリーの子孫が参列されますが、遠方から来る方もおられます。昨年はドン・メッサースミス（Donald Messersmith）さんと二人のお嬢様、そして甥のビル・シェレルツ（Bill Sherertz）さんが来られました。ドンさんに同窓会ツアーのことをお知らせした時、「それなら私も初めて『ランバス・デイ』に参列しよう」とお返事をくださいました。しかも、ジャクソンで私たちと同じホテルに滞在できるよう手配されました。私がドンさんと知り合ったのは、関西学院が行ったランバス生誕一五〇年記念行事出席のためご夫婦で来日された時でした。残念ながら、奥様のシェリーさん（Margarita Park Sherertz Messersmith ウォルターの妹の孫）はその前年亡くなられました。私はツアーの参加者より一日早くジャクソン入りしましたので、ドンさんとゆっくりお話しする時間を持つことができました。嬉しいことに、ドンさんは昨年の参加がご縁となり、今年の「ランバス・デイ」でメアリー・ランバスについてお話しされたそうです。

次に、テネシー州ナッシュビルでお世話になった方々です。関西学院大学は数多くの海外の大学と協定を結んでいて、アメリカだけでも三〇校以上に上ります。しかし、残念なことに創立者の母校ヴァンダビルト大学とは協定を結んでいません。私は、一度だけお会いしたことのある同大学職員マリー・マーティン（Marie Martin）さんに連絡しました。マリーさんは、二〇一〇年に日米教育委員会フルブライト交流プログラムの一員として関西学院に来られました。その歓迎昼食会に出席した私は、ヴァンダビルト大学が関西学院創立者の母校であること、吉岡美国第二代院

長を始め、何人もの教師や卒業生の留学先であったことを話しました。そんな私のことをマリーさんは覚えておられたようで、快く関係部署の職員を紹介してくださいました。私は、ランバスが学んでいた頃のキャンパスの様子が想像できるようなツアーをして欲しいとお願いしました。すると、同大学の歴史に詳しいライル・ランクフォード（Lyle Lankford）さんという方が、ランバスが使っていた校舎の前からスタートする素晴らしいツアーを提供してくださいました。

交渉に苦労したのはウッドバイン教会（Woodbine United Methodist Church）です。手紙を出しても、メールを送っても反応がなかったのです。日本から電話もかけました。さらに、ミルサプス大学のデブラさんにもお願いして、連絡を取っていただきました。こうしてようやく約束できた日時に教会を訪問してわかったことは、牧師が日を勘違いしておられたことです。それでも何とか教会に入ってステンドグラスを見ることができました。少し遅れて牧師も駆けつけられました。

今年、高等部の夏期英語研修旅行に同行されるデルミン先生からナッシュビルでの訪問先について相談を受けました。昨年の同窓会ツアーが大成功だったことを知り、生徒を連れてヴァンダビルト大学とウッドバイン教会を訪ねたいと思われたそうです。ヴァンダビルト大学のライルさんは既に退職されていましたが、昨年同様、素晴らしいキャンパス・ツアーをしてくださったそうです。また、ウッドバイン教会では日曜礼拝に出席し、大歓迎を受けたそうです。昨年、私たちの訪問日を勘違いした牧師の姿はなく、新しい牧師に代わっていたそうです。

同窓会が訪問した教会を翌年、若い高校生のグループが訪ねて大歓迎されたことは、本当に嬉しいことです。また、関西学院の知名度が東京方面で低いと耳にすることがありますが、ミシシッピー州のある地域では抜群の知名度であることもよくわかり、大変心強く思いました。

神田　今日はシンポジウムということですが、三年に亘って旅を、経験をいろいろ共有され、その意義をいっしょに考えるという側面がありますので、先ほど多田さんからお伺いしたら三回とも行かれた方は九名ぐらいいらっしゃるのでしょうか。

多田　三回で延べ一〇〇名と申し上げました、三回参加されたのは九名で、二回行かれた方が二六名、ですから三回で延べ一〇〇名ですから、六五名の方に行っていただいた

ということになります。大きいですね。

神田　それではアメリカの旅の団長を務められた辰馬副会長より何か行かれたご経験についての感想をいただけたらと思います。

辰馬　辰馬でございます。私はアメリカの本土を訪ねる旅に参加させていただきまして、本当に貴重ないい経験をさせていただいたと思っております。これもひとえに皆さま方のご準備の賜物だと思っております。またグルーベル先生がご一緒に行っていただいたということが、大きくプラスの影響になったというふうに感謝しております。特にパールリバー教会を訪問したこと、その他向こうの方々が関西学院に対して温かい歓迎をしていただいたこと、そしてまたランバス博士が、現地では本当に歴史上重要な人物になっておられる、非常に尊敬されていることを身をもって感じたことでございます。私はアメリカだけしか訪問しておりませんでしたが、ぜひとも三回にわたって旅行された方々のご意見もぜひ聞きたいというふうに思っております。本当にありがとうございました。（拍手）

神田　ありがとうございました。今日はとくに、三回とも出席された方もおられますのでぜひご感想をお願いいたします。

多田　三回ご出席された方は大阪支部の澤さんですね。

神田　澤さんよろしくお願いいたします。

澤　大阪市の住吉に住んでおります。多田さんとは同窓会の公認団体になっています食文化研究会でご一緒しておりまして、この企画ができる五年前から、「来年ブラジル行くから夫婦で来なさい」というまったく説得のような形で要望を受けておりました。夫婦でよく海外に行くのですが、ここ三年間はこれで十分妻に義務を果たせるなと、多田さんの熱意ある説得にも応じまして参加させていただきました。三回それぞれ個人的に興味を持っておりますが、いちばん関心がありましたのは、元々大阪市の職員なんですが、関西学院を出まして金融機関におりまして、そのあと大阪市に入って第一の赴任先は大阪市立大学でした。公立の大学です。市民が建てた大学であるということで、関学はマスタリー・フォア・サービスですが、大阪市大は市民に還元するかたちの大学で教員の方々もかなりそういう意識を持っておられます。三回行きまして、ランバス先生の非常に献身的な行動、これには非常に私たちも感銘を受けたのですが、各大学を訪れた時にその大学はどんな形で継承されているのか考えさせられました。サンパウロ大学でもそうだし、アメリカのヴァンダビルト大学でもそうです

し、上海の蘇州大学でもそうでした。去年行った時にアメリカの場合は、大学というのは寄付文化で支えられていると、今回関学も一二五周年ということでいろいろとおつくりになっておられますが、大学は自分たちのまちの誇りであるし、成功された方は社会還元するということで大学を支えるためにいろんな寄付行為をされている。卒業生でなくてもいろんな方が寄付をされている。そういうことに感銘をうけたのですが、日本の大学では官主導、国立大学がメインで、私学の場合も募金活動をしていますが、ＯＢとしてあるいはＯＧとして母校に何ができるかというと、同窓会活動の原点を考えた時同窓生同志の交流が同窓会の役割かもしれないけれども、母校を支援する役割が非常に大きいであろう。そのなかで現役学生に対してＯＢが何か貢献できるかたちの大学が望ましいのではないかなとこんなふうに感じました。旅行はどうだったかといえばランバス先生の偉大な功績、これには感服した。これだけ申しあげて、あとは大学のあり方はどうあるべきかということを考えさせていただいたなということです。

神田　東京から来られた方にも、一言お願いいたします。

川田　突然に困るのですが、私と大倉さんと今出席させていただいているのですが、五〇年以上前に関西学院を卒業し、東京同窓会に属していまして、日頃いろいろ参加しているお蔭でこういう情報も知りました。たまたま参加しましてとてもいい経験をさせていただいて本当に感謝いたしております。学生時代もっと勉強をしていたらよかったのですが、ただ卒業しただけでこんな良い目に遭わせていただけるのは何よりランバス先生に感謝しなければならないなと思いましたのでお礼申し上げます。ありがとうございました。（拍手）

神田　それから今年の渡辺団長、お願いいたします。

渡辺　こんにちは、渡辺です。私は上海へ行かせていただきました。上海に着いた時に多田さんから「渡辺さん上海は何べん来ているんや」と聞かれ、「一五〇回ぐらいかな」と答えたら家内が横から「二〇〇回以上」と。女の人は怖いです。チェックしていました。それくらい中国には来ていましたが、本当に今回のツアーが私にとっては最も印象に残っているツアーです。院長先生とご一緒だということでまず緊張しましたが、もし何かあった時、俺が体で守らないといけないと思っていました。あるところからいろいろなことが出て来ましたので、中国大丈夫ですかと言われ、私が守りますと言ったら笑っておられました。そんな変な雰囲気もなく、蘇州大学のツアーは歩くのが辛くて

これは参ったと思ったのですが、今、こういうふうに振り返って見ていますと、いろんなこと見せていただいてありがたかったなと思います。ムーオンタンで私は三回くらい礼拝を経験しているのですが、今度の礼拝が、中国のキリスト教の伸びというのか隆盛というのか、本当にすごくて、熱気のすごさを感じました。最初の時はそんなにも思わなかったのですが、今回はキリスト教の礼拝というのを中国の人が頑張ってやっているなということを感じました。あと、院長先生のお供をして他の上海の教会を回ったのですが、やはりすごいです。でも共産党が支配していますので制限はあると思うのですが、我々のプロテスタントとカトリックの教会は北京にあるのですが、聖公会の教会だけが上海であることを許されておりまして行きました。ミラノのドゥオモのステンドグラス、あれよりすごいなと思うようなステンドグラスがありまして、中国政府がお金を出したらしいのですが、やはり支配されている部分があるのでこれはしんどいだろうなというのが、その点キリスト教は自由な発想でものごとを考えられるので幸せだなと思います。最近つくづく思っていますのは、なぜ大学の時に勉強しなかったのかなということで、ここ十何年同窓会や学校に関係するようになってから、勉強ではないのですが、割合まじめに学校に来るようになりまして、学生の時に「お前もうちょっとしっかりしとったらなあ」というのが、最近の反省です。ありがとうございました。（拍手）

多田　渡辺さんは中国交流団の団長で、同窓会の副会長でございます。今仰っていましたが、三回とも何もなかったと申しましたが、じつはセキュリティ面でたいへん神経を使いました。とくにブラジルと中国、そのへんを事前にいろいろ準備をいたしました。こんなことまでやらないといけないかなと思ったことをやった結果、無事に皆さん楽しく過ごされたのではないかと思います。

神田　もう少し時間がありますので、元院長の宮田先生、山内先生もおられますので、一言いかがでしょうか。

宮田　一〇〇周年の時に院長を仰せつかっておりました宮田です。今日の報告をたいへん印象深く聞かせてもらいました。私はどのツアーにも参加しなかったのですが、だいたい私の性質は自分もついその気になります。ですから行っていないのに報告をうかがって映像を見ていますと、自分もその場所におったような感じになりましてたいへん感激して見ておりました。ありがとうございました。

　もうひとつは、私が院長になって間もなく、ジャクソンにありました当時ランバスカレッジと呼んでいた学校の

学長が訪ねて来まして、その時お土産にとランバス先生の持っていた杖の複製をいただきました。アカデミックプロセッションといって、式で、学長などがガウンを着て出てくる時、映画などにもありますが、権威の象徴の杖を手にしています。ランバスカレッジでは、ランバス先生の竹でできた杖を使うのだそうです。その複製をプレゼントすると言って、立派な松の木をくり抜いたケースに杖を入れたのをいただきました。私は今話を聞いていてあの杖はどこに行ったのかなと思いました。

池田　学院史編纂室で保管しております。

宮田　安心いたしました。いまお話にあったジャクソンにある行かれた大学とは。

池田　ミルサプス大学です。

宮田　それは前のランバスカレッジですか。

池田　ランバスカレッジはミシシッピー州ではなく、テネシー州のジャクソンにありました。

神田　山内先生、ひと言お願いします。

山内　私も、今日のたいへん有意義な会に参加をさせていただいて感謝をしております。現職時代にブラジル、アメリカ、中国それぞれいろんな形で訪問させていただきました。ブラジルには宮田先生もご一緒させていただきました。今回多田さんのたいへんなご尽力で同窓会を中心に三回に亘るランバス宣教師の足跡を訪ねる旅が、普通の意味での成功というのでなくて意味のあるプログラムとして終了したことを皆で喜び感謝したいと思います。私は一九七九年、学院の九〇周年の時に先ほどお話がありましたが、久山理事長・院長のお骨折りでランバス先生の生涯をフィルムに収めるプロジェクトがありました。その時に初めてアメリカのパールリバー教会に行きました。映画を撮影しながらで大変ヘビースケジュールな旅行でしたが、いよいよナッシュビルから南下してパールリバーに行く時は、関西学院のルーツにいまから行くのだと興奮しました。現地に行ってみますと、さっきフィルムでご覧になったように木造のたいへん素朴な小さな礼拝堂と家族の記念碑、それから祖先のお墓があるだけで、いよいよ関西学院のルーツということで胸が高まっていただけにちょっとがっかりしたんです。しかし、そこで二、三時間過ごすほどに、いろいろ考えさせられました。関西学院のランバス・ファミリー、そもそも目に見えるルーツを求めていたんではないか、そうではなくて本当のルーツというのは目に見えないスピリットというものが根底にあるはずで、そういう意味では何か壮麗な記念の建物とかそういうものではなくて、ランバス

先生はじめランバス・ファミリーの生涯を貫いていたスピリットといいますか志というのをそれに想いを馳せるということが一番大事だということに思いが至りました。そして一緒に語り合ったのですが、ランバス先生のスピリットが私たちより先に日本に帰って関西学院で今私たちにこういう道を一緒に歩もうと呼びかけをされているということに気が付きました。ただ足跡を目に見える形のものを求めるものではなくて、その根底に流れている魂、志、それをいまの時代関西学院が本当に受け止めて、その原点にかえって、創立一二五周年を迎えましたけれども、「もう一二五周年」ではなく、「まだ一二五周年しか経っていない」と、これから二〇〇年、三〇〇年、ランバス先生、家族の偉大な志というものをどういうふうに継承して、人類の平和のためにこの関西学院という学校が本当に夢をもつ学園として発展していくか、そのことを改めて思わされる次第です。今日は本当にありがとうございました。（拍手）

神田　山内先生には今日のシンポジウムのまとめのようなご発言をいただきました。ありがとうございました。これで終了させていただきます。

　このシンポジウムのために周到にご準備してくださった三名の方々、グルーベル院長、多田さん、池田さんに皆さん拍手をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。（拍手）